

機関番号：72810

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520670

研究課題名（和文）中央アナトリアのヒッタイト象形文字の研究-カマン・カレホユック出土資料を中心に-

研究課題名（英文）Studies of the Hittite Hieroglyphs in Central Anatolia -on the base of the finds from Kaman-Kalehöyük

研究代表者

吉田 大輔（YOSHIDA DAISUKE）

（財）中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所研究員

研究者番号：20280670

研究成果の概要（和文）：本研究は、カマン・カレホユック遺跡（トルコ共和国のほぼ中央部）から出土したヒッタイトの印章の研究の一環として行われた。円形遺構 1 出土の約 700 点の印影付粘土塊をはじめカマン・カレホユックの全てのヒッタイトの印章資料を対象として、必要に応じ新たな実測図の作成や写真撮影、基礎的データの入力などを行い、これをほぼ終えることが出来た。象形文字については、その意味や音価の同定のみならず、これ迄ほとんど研究されてこなかった象形文字の時代的・地域的な変化にも着目した。またマルカヤの岩碑文のような、カマン・カレホユック遺跡近郊の象形文字碑文の調査も実施した。

研究成果の概要（英文）：At Kaman-Kalehöyük, situated approximately in the middle of the Republic of Turkey, seals belonging to the Hittite period were excavated. In this study, for almost all of the seals excavated from the site, including about 700 clay objects with seal, drawing, photographing and data entry work were done. The transition of hieroglyph in different period and area, which have not been studied, was focused on, together with its semantic and phonetic values. In addition, hieroglyphic epigraphs near the site, such as the hieroglyphic rock inscription of Malkaya were studied.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：古代アナトリア学

科研費の分科・細目：史学・考古学（3105）

キーワード：象形文字、アナトリア、ヒッタイト、印章

1. 研究開始当初の背景

エジプトの象形文字とは明らかに異なる独特な絵文字で石や岩に刻まれた碑文がシリアや南東アナトリアで次々と発見されるようになったのは 19 世紀後半のことである。当時ボアズキョイ（現ボアズカレ、ヒッタイトの都ハットゥシャ）はまだ発掘されておらず、ヒッタイトについてはほとんど何も知られていなかったが、研究者たちはこの碑文が

ヒッタイトと関わるものであることを正しく推定し、独特な絵文字は一般に「ヒッタイト象形文字」と呼ばれた。碑文はシリア、南東アナトリアを中心として、遙かに西のエーゲ海沿岸に至るアナトリアの各地で確認され、また同じ象形文字の記された印章／印影も報告されるようになった。

発見とほぼ同時にこの「謎の絵文字」の研究も開始されたが、文字、言語とも不明なうえ

に、既知の言語との対訳碑文のような解読に有効な資料にも乏しく、その解読は困難をきわめた。「ヒッタイト象形文字」で記された碑文をある程度正確に読み、その内容を理解出来るようになったのは比較的最近になってからのことであり、「ヒッタイト象形文字」で書かれた言語がヒッタイト語ではなく、ルウィ語（ヒッタイト語と同様インド・ヨーロッパ語に属し、主に前2～1千年紀の南、西アナトリアで話されていたと考えられている）であることも明らかとなった。ただ今なお意味や音価の不明な文字が少なくなく、特に前2千年紀のヒッタイト王国時代の象形文字については、文字の起源、文字としての発展過程なども含めて未だ十分に解明されていない問題を多く残している。

前2千年紀の「ヒッタイト象形文字」の最も重要な資料となっているのは印章である。当時のアナトリアでは、メソポタミアから招来された楔形文字とアナトリア独自の象形文字が併用されており、象形文字は浮彫像の碑銘の神名、人名の他、主に印章の印面に所有者の名前や役職、性別などを表記するのに用いられた。この時代の印章資料が近年の発掘で大量に発見され、注目を集めている。なかでも特筆されるのがボアズキョイのニシャンテペの遺構から出土した総数約3千3百点の印影付粘土塊（1990/91年）、そして中近東文化センターが1986年以来発掘調査を進めているカマン・カレホユック遺跡の北発掘区の円形遺構1（IIIb層）から出土した約700点の印影付粘土塊である（1994～2001年）。ボアズキョイ-ニシャンテペの印影資料は、新王国時代（前14世紀後半～12世紀初頭）の全てのヒッタイト王の王印2千点余りを含み、量・質ともにこれ迄にない画期的な発見であった。一方カマン・カレホユック円形遺構1の印影資料は、ボアズキョイのそれと比べて量こそ劣るものの、従来あまり知られていなかったヒッタイト‘中王国’時代（前15世紀後半～前14世紀前半）の印章であることから、ヒッタイト印章、また印面の象形文字の古王国時代（前17世紀後半～前15世紀前半）から新王国時代への発展過程を跡付ける上で極めて貴重な資料となっている。このような豊富な資料をふまえて、ヒッタイトの印章、とりわけ印面の「ヒッタイト象形文字」の研究は今新たな段階をむかえようとしている。その中であってカマン・カレホユック出土の印章資料、象形文字資料の持つ意味は大きく、今後の研究の進展に大きく寄与しうるものと考えられる。

2. 研究の目的

カマン・カレホユック出土の印章資料については、すでに平成12～15年度及び平成16～18年度に科学研究費補助金を受けた研究課

題（課題番号：12571033、16401021）の一環として研究を行ってきた。本研究は、その研究成果をもとに、特に印面の「ヒッタイト象形文字」に焦点をあて、さらに考察を深めていくことを主目的としている。

前18世紀頃に起源すると言われる「ヒッタイト象形文字」は、前15世紀前後から文字として本格的に使用されようになった。それ以前の表意的、シンボリックな文字／記号に加えて、前15世紀を境に表音文字も多く見られるようになり、文字として大きな飛躍を遂げる。カマン・カレホユックの円形遺構1出土の資料は、まさにこの「ヒッタイト象形文字」がその原初的段階から文字本来の機能を確立していく時期に位置付けられる。古王国時代（前17～16世紀）以来の伝統を残しながらも、すでに新王国時代（前14世紀後半～12世紀初頭）の特徴もはっきりと認められ、言わば新旧の混在する過渡期にあたる。本研究では、このカマン・カレホユックの出土資料を中心に、中央アナトリア各地、特にボアズキョイやマシャット、クシャクルなど主要な遺跡から出土した印章資料との比較研究を進め、資料不足のためこれ迄研究の遅れていた前15/14世紀に焦点を当てながら、前2千年紀の「ヒッタイト象形文字」の全体像、その発展過程をより正確に把握することを目指す。同時に象形文字の字形の変化にも着目し、資料の年代付けの基準としての可能性を探る。

3. 研究の方法

本研究は、カマン・カレホユック遺跡出土の印章資料の研究の一環として行われ、特にその印面に刻まれた「ヒッタイト象形文字」に重点を置いたものである。現地での調査研究は、考古学、保存修復の研究者／専門家と連携・協力しながら、カマン・カレホユック遺跡に隣接するアナトリア考古学研究所で実施される。現地では、オリジナルの資料をもとに象形文字の意味／音価の特定、分析を行うとともに印章資料全般のデータを整備し、カマン・カレホユック出土のヒッタイト時代の印章資料の基礎データの作成を終える。また可能な範囲で中央アナトリアで確認されている象形文字資料の実地調査を行う。なお本研究には、共同研究者としてロンドン大学／オクスフォード大学のM. ウィードンが参加し、またロンドン大学の「ヒッタイト象形文字」研究の第一人者J. D. ホーキンス教授とも協力して研究を進めて行く。

4. 研究成果

(1) アナトリア考古学研究所に保管されているオリジナルの印章資料については、円形遺構1出土の約700点の印影付粘土塊をはじめ、これまでカマン・カレホユック遺跡から出土

したほぼ全てのヒッタイト時代の印章資料の調査を終了した。従来の研究とも合わせて、その成果は、総括的な研究書『カマン・カレホユックのヒッタイト印章』（仮題）として近年中に出版する予定にしている。カマン・カレホユック遺跡は古王国時代から新王国時代末期にいたるヒッタイトの全時代にわたる豊富な印章資料を包含し、またそれを考古学・層位的に検証できる希有な遺跡であり、ヒッタイト印章研究の進展に大きく寄与するものとする。

(2) カマン・カレホユック遺跡以外の中央アナトリアの象形文字資料としては、ボアズキョイやマシャットなど主要な遺跡出土の印章資料が第一義的に重要であるが、それらとの比較考察は主にそれぞれの報告書をもとに行われた。現地調査として特筆されたのは、カマン・カレホユックの東約40km（クルシェヒールの西約8キロ）に位置するマルカヤの岩碑文（図1）の調査である。このヒッ



図1. マルカヤの岩碑文（部分）

タイト新王国時代（前13世紀）の象形文字碑文については、1947年に発見されて以来すでに H. Th. Bossert や P. Meriggi らによって調査が行われており、今回はその再調査である。発見当時からしても碑文の風化はさらに進行していたが、今回の調査で、これまで判読出来なかった幾つかの文字の読みが新たに同定され、L. 324-ziti（王子）とその家族の名前（x-parinaia、Ura-Tarhunda など、いずれもルウィ語名）が確認された。また注目すべきことは、カマン・カレホユック円形遺構1出土の印影とマルカヤの岩碑文のある特定の象形文字の読み、形状に両者に共通する特徴が認められることである。円形遺構1出土の印影（前15世紀末～14世紀前半／中頃）とマルカヤの岩碑文（前13世紀、恐らくその後半）の間には一世紀前後の時間的隔りがあるが、両者に共通する特徴的な文字の存在は「ヒッタイト象形文字」の地方性という観点から、今後の象形文字研究の一つの方向性を示すものとして注目される。なおマルカヤの岩碑文については、近刊のアナトリア考古学研究所の欧文紀要 *Anatolian Archaeological Studies* Vol. 17 に、J. D. Hawkins と M. Weedon によって詳しく報告されている。

(3 「ヒッタイト象形文字」は前18世紀頃南東アナトリアで使用されるようになったと一般に考えられており、以来前7世紀初めに至るまでの約1,000年の歴史を持つ。当然ながらこの間に文字は、時代、地域によって様々に変化を受ける。この字形の変化の問題は、ヒッタイトの楔形文字については1960年代後半から精力的に研究が進められ、今日では文書の年代付けの重要な基準の一つとして確立されている。一方「ヒッタイト象形文字」に関しては、資料の絶対的不足、時代的・地域的偏り、また字形が書材の材質（岩、石、金属、粘土など）や一人一人の書き手の癖に左右されやすいこともあり、この方面の研究はほとんど行われてこなかった。本研究ではボアズキョイやカマン・カレホユック出土の豊富な新資料をふまえて、この問題にもアプローチした。

字形の変化を考察にとっては、比較資料の多い文字、つまり古い時期から新しい時期まで全時代を通して頻繁に使用される文字で、しかも字形の変化が比較的捉えやすい文字が、特に有効である。そのような標準的な文字として例えば VITA “生命”、CERVUS “鹿”、PES “足” が挙げられる（図2）。

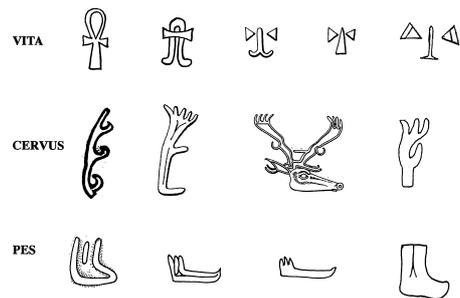


図2. VITA “生命”、CERVUS “鹿”、PES “足”

エジプトのヒエログリフ（アネク Ankh）に起源する VITA “生命” は「ヒッタイト象形文字」のごく初期の段階からみられる文字／シンボルで、特に印章の印面には多用される。初期段階から古王国時代、新王国時代と文字の変化も追いやすく、印章の年代付けには極めて有効である。CERVUS “鹿” も比較的古くからみられる文字で、鹿の角、鹿の頭部、鹿の全体像を象った三種類の文字が知られており、カマン・カレホユックの円形遺構1出土の印影にもしばしば登場する。古王国・‘中王国’時代の用例のほとんどは鹿の角を象ったもので、鹿の頭部、全体像が見られようになるのは新王国時代以降のことである。実際‘中王国’時代後半に位置づけられる円形遺構1の印影にみられる例もいずれも鹿の角を表したもので、鹿の頭部、全体像はこれ迄確認されていない。また鹿の角は古王国時代から前1千年紀の後期ヒッタイト時代に至る全

時代を通じて認められるが、時代によってその形状に変化のあることが確認された。PES “足”は‘中王国’時代以降の例しか知られていない。PESの場合、時代的变化と同時に、地域差も認められるように思われる。

「ヒッタイト象形文字」の字形についての研究は、まだ緒についたばかりであるが、上記のVITA、CERVUS、PESの例にも見られるようにはっきりとした時代的、あるいは地域的特徴が認められる。同様なことは他の文字にも次第に明らかにされつつあり、今後さらに綿密な比較研究を進めていくことにより、資料の年代付け、地域の特典などに極めて有効な手段になりうるものと期待される。

(4) 印影付粘土塊は土器をはじめとする各種の容器、箱、袋等の内容物を保全する為の封印、あるいは建物／部屋の扉、門の封印として用いられた。ただ粘土塊は封印が解かれる際に当然ながら破壊される為、破片でしか現存せず、それが実際にどの様に使用されたかを個々の事例から明らかにすることは必ずしも容易ではない。カマン・カレホユック円形遺構1から出土した粘土塊の場合もこの点は同様であるが、一つ注目されるのは、他にはあまり例のない特異な形態の粘土塊が多数出土していることである。

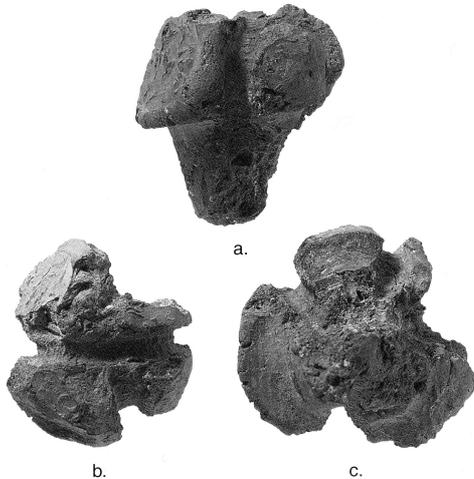


図 3. カマン・カレホユック出土の「キノコ形」粘土塊
a. 側面 b. 上部 c. 下部

この粘土塊は半円形の「頭部」と逆円錐形の「胴部」からなる「キノコ形」をしている。印影は「頭部」全体に密に複数捺されており、「胴部」にもまばらながら印影が認められる。確認できる限りでは紐痕は2本あり、「頭部」の頂点付近でほぼ直角に交差し、各々「胴部」の末端に通じているように見える(図3)。この「キノコ形」の粘土塊ははたしてどの様にして用いられていたのでしょうか。「キノコ形」という形態からみればその用途として

まず考えられるのは細口容器の栓であるが、「胴部」にも印影が認められることからその可能性は極めて低い。最も可能性が高いと思われるのは、粘土塊が容器や箱に直接にはなく、紐で繋がれていたことである。つまり2本の紐が粘土塊の「胴部」の末端から外へ伸び封印の対象と繋がれていたものと考えられる。

このようにカマン・カレホユックの印章資料は、その具体的な使用法に関しても貴重な情報を提供している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① M. Weedon, A Hittite Seal from Kaman-Kalehöyük, in I. Singer (ed.), *ipamati kistamati pari tumatimis. Luwian and Hittite Studies presented to J. David Hawkins on the occasion of his 70th birthday*, 2010, pp. 249-255

② J.D. Hawkins & M. Weedon, The Hieroglyphic Rock Inscription of Malkaya: a New Look, *Anatolian Archaeological Studies* Vo. 17, 2011 (in print)

[学会発表] (計2件)

① 吉田 大輔、カマン・カレホユック出土のヒッタイト新王国時代の印章、第18回トルコ調査研究会(2008年4月20日)

② 吉田 大輔、「ヒッタイト象形文字」の変遷 -VITA “生命”、CERVUS “鹿”、PES “足”の場合-、第19回トルコ調査研究会(2009年3月29日)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計◇件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 大輔 (YOSHIDA DAISUKE)
(財)中近東文化センター・アナトリア
考古学研究所・研究員
研究者番号：20280670

(2) 研究分担者

大村 幸弘 (OHMURA SACHIHIRO)
(財)中近東文化センター・アナトリア
考古学研究所・所長
研究者番号：10260142

(3) 連携研究者

()

研究者番号：